

聞 一多『死水』試論 〔二〕

楠 原 俊 代

二

自らの口一杯に泥砂をつめこむかわりに、頭蓋骨を田鼠もぐらに穴掘らせ血肉の塊を蛆虫に食らわすかわりに、聞一多は、一体何をうたったのか。それは、とりもなおさず周囲の呻き声に耳をすまし、寡婦や孤児のわななく姿、塹壕の中の瘵變、病床を噛む狂人、そして生活の石臼の下に碾かれる各種の惨劇をしっかりと見つめ、それらをうたいあげることであった。詩「静夜」において、もしも自らが個人の喜びと悲しみしかうたえないのなら、その口一杯に泥砂をつめこんだ方がましだとさえ言い放った聞一多に与えられた詩のテーマは、すなわち、国家と民族の問題なのである。

好むと好まざるとにかかわらず、人が自らの独自性をも含めてその民族および国家に包括されないではあり得ないことを、最も痛切に思い知らされるのは、全く異質な国家、民族そしてその文化のなかに置かれたときであろう。聞一多は、一九二二年から二五年までの三年間、アメリカに留学している。つきにあげる「洗濯の歌〔洗衣歌〕」（『聞一多全集』第三卷『死水』所収、以下全集版と称す）は、彼のアメリカ留学時代を彷彿させる作品である。

洗衣歌

洗濯の歌

洗衣是美國華僑最普遍的職業，因此留學生常常被人問

洗濯屋はアメリカ在住華僑に最も多い職業である。だから留學生は

道「你爸爸是洗衣裳的嗎？」

いつも聞かれる、「君のお父さんは洗濯屋か。」

(一件, 兩件, 三件)

(一枚 二枚 三枚)

洗衣要洗乾淨!

洗濯するならきれいに洗おう

(四件, 五件, 六件)

(四枚 五枚 六枚)

熨衣要熨得平!

アイロンかけならまっすぐかけよう

我洗得淨悲哀的溼手帕,

私は悲しみに湿ったハンカチをきれいに洗う

我洗得白罪惡的黑汗衣,

私は罪惡に黒ずんだ下着を白く洗う

貪心的油膩和慾火的灰……

貪欲の垢と欲火の灰……

你們家裏一切的髒東西,

あなた方の家の汚れたものは一切合財

交給我洗, 交給我洗。

私にわたして洗わせろ 私にわたして洗わせろ

銅是那様臭、血是那様腥、
 髒了的東西你不能不洗、
 洗過了的東西還是得髒、
 你忍耐的人們理它不理？
 替他們洗！替他們洗！

你說洗衣的買賣太下賤、
 肯下賤的只有唐人不成？
 你們的牧師他告訴我：
 耶穌的爸爸做木匠出身、
 你信不信？你信不信？

胰子白水要不出花頭來、
 洗衣裳原比不上造兵艦。
 我也說這有什麼大出息——
 流一身血汗洗別人的汗？
 你們肯幹？你們肯幹？

銅はあんなに臭く 血はあんなに腥なまぐさい
 汚れた物は洗わなければなるまい
 洗ってしまった物もやっぱり汚れてしまう
 忍耐強いあなた方は放ほうっておくのか

彼らに代わって洗ってやれ 彼らに代わって洗ってやれ

君は洗濯屋という商売は賤しすぎて

賤しい商いをするのは唐人だけだとも言うのか

あなた方の牧師が私に教えてくれた

イエス・キリストのお父さんは大工だったと

君は信じないのか 君は信じないのか

石鹼とただの水では手練手管は使えない

洗濯はもともと軍艦を造るのにはかなわない

われながら一体どんな見込みがあるものかと思つ——

血と汗を身体中に流して他人の汗を洗うのか

あなた方にはやれますか あなた方にはやれますか

年去年來一滴思鄉的淚，
半夜三更一盞洗衣的燈……

下賤不下賤你們不要管，
看那裏不乾淨那裏不平，
問支那人，問支那人。

我洗得淨悲哀的溼手帕，
我洗得白罪惡的黑汗衣，
貪心的油膩和慾火的灰，
你們家裏一切的髒東西，
交給我——洗，交給我——洗。

年が去り年が来たりて故郷を思う涙の一滴^{ひとしずく}

真夜中に洗濯屋の燈が一つ……^{あかり}

賤しかろうとなかろうとそんなことにはかまわずに
汚れていたら 皺がよっていたら
支那人に聞け 支那人に聞け

私は悲しみに湿ったハンカチをきれいに洗う
私は罪惡に黒ずんだ下着を白く洗う
貪欲の垢と慾火の灰
あなた方の家の汚れた物は一切合財
私にわたして——洗わせろ 私にわたして——洗わせろ

(一件, 兩件, 三件)

洗衣要洗乾淨!

(四件, 五件, 六件)

熨衣要熨得平!

(一枚 二枚 三枚)

洗濯するならきれいに洗おう

(四枚 五枚 六枚)

アイロンかけならまっすぐかけよう

*脚韻：a b a b × c × c c × c × c c × b × b b

× a × a a × b × b b × c × c c a b a b

この詩にうたわれた「洗濯屋」について、謝冰心（一九〇〇〜）は、「詩人と政治」⁽¹⁾のなかで、つぎのように語っている。

「皆さん東京に中国料理屋がたくさんあることを御存じでしょう。けれどまだ中国の洗濯屋はご存じないと思います。中国人は外国でしごとをしますのに政府の補助などありませんから、みな自力で生活を立てなければなりません。そこで外国へ行って働くのに一番手近な仕事は料理屋と洗濯屋です。なぜなら、資本がかからずただ自分の手さえ動かせばよいからです。外国人の中には、中国人はこの二つの仕事しか出来ないと思っている人が多いいのです。私がアメリカにまいりました時、まず最初に聞かれたのは、貴女のお父さんは料理屋かということでした。」

謝冰心もまた、一九二三年から三年間、聞一多とほぼ同じ時期にアメリカに留学している。そのとき、何よりもまずはじめに聞かれたのが、あなたのお父さんは料理屋かということであり、そして聞一多のほうは、「貴方のお父さんは洗濯屋か」ということであったという。

そもそも英語では、中国人 Chinese を軽蔑している場合、Chink, Chinaman を用いるが、*Dictionary of American Slang*⁽²⁾には、*chink*、

Chinaman n. A sailor who works in a ship's laundry.

とさえ記されてある。Chinamanとは、すなわち、中国人に対する蔑称であるとともに、船の洗濯場に働く水夫をも指す言葉なのだ。聞一多は、「アメリカ在住華僑の十中八九は洗濯を生業としている」と述べているが、洗濯屋の店を持つこともなく、ただ両の手だけをたよりに、船の洗濯場で働く水夫らの大半が、あるいは華僑であったかもしれない。事実、「洗濯屋という商売は賤しすぎて、こんな商売をするのは唐人だけだ」ともいわれていたという。「洗濯の歌」の原詩にうたわれた「支那人」とは、このChinamanの訳語なのである。

『辞海』(一九七九年版)、「支那」の項には、

——古代インド、ギリシャおよびローマ等の地方では、中国をCina, Thin, Sinae等と称す。あるいは、これらはすべて秦国の「秦」の字の発音を移したものであったかもしれない。その後、仏教の経典のなかで、支那、至那、脂那等と訳す。近代日本では、かつて中国を支那と称したことがある。

とのみ記されてある。『現代漢語詞典』には「支那」の項さえ設けられていない。本来、中国においては、自国を「支那」と称することはなく、「支那」とは、自国をさす外国語の音訳の一つであり、また日本語だったのである。しかも、この日本語の「支那」という語について、かつて竹内好は、「支那と中国」(『中国文学』第六十四号、昭和十五年八月一日)のなかで、

——支那を支那と呼び支那人を支那人と呼ぶことは支那人の感情を害うから、宜しく中国及び中国人と称すべしという論が行われている。

——彼(郭沫若)ほど激しくないにしても、一般の支那人が、とくに青年が、支那という言葉を嫌ったことは異常なものである。支那という言葉を嫌うために、従ってその言葉を用いる日本人を嫌うという論理を考えた留学

生さえあった。

と書いている。そして

——では、今日支那人によって用いられる内容の中国という言葉が形成されたのは何時ころであるか。愚見によれば、梁啓超（一八七三—一九二九）ではないかと思う。

とし、だが、

——中国の開宗である梁啓超は、同時に支那という言葉も頻りに用いている。（略）梁啓超についていえば、彼は支那を外国人の支那に対する称呼として中国とは区別して使用したようである。これで見ると、当時に於て支那という言葉に被侮蔑感をもたなかったことは明かである。

という。実藤恵秀『増補 中国人日本留学史』⁽⁸⁾によれば、

——日本人の口から「支那」をきいて不快に感ずるようになったのは、二十一か条——シベリア出兵——パリ平和会議と日本の野心がつきつきにあらわれるにつれてのことであって、五四運動以後のこととおもわれる。

という。

一九二一年十月に発表された郁達夫（一八九六—一九四五）の小説「沈淪」⁽⁹⁾には、はっきりと

「日本人は中国人をさげすんでいる。それはわれわれが豚や犬をさげすむのと同じだ。日本人はみな中国人を『支那人』と呼ぶ。この『支那人』なる三文字は、日本では、われわれが人を罵るときに『賤賊』よりもさらに聴きづらいものだ。」

と記されてある。また、鄭伯奇（一八九五—一九七九）の短編小説「最初の授業」⁽¹⁰⁾（『創造』季刊創刊号、一九二二年

三月十五日)には、京都の高等学校に入学した留学生屏周が、最初の授業で、教師から「清国人か」と問われ、立腹しつつも「中華民国人です」と冷静に答えたところ、「なに、中華民国、支那じゃないか」と軽蔑され、さらには、「世界中に最も多く、しかもいたるところにいるものは、ねずみと支那人だけで……」、「支那人でも発明できるのか」などと嘲笑されたことが書かれてある——郁達夫は、一九一三年から二三年まで、鄭伯奇は、一九一七年から二六年まで、いずれも日本に留学している。

聞一多は、少なくとも、この「最初の授業」は読んでいた。聞一多が、官費留学生として、アメリカへ向けて祖国をたったのは一九二二年七月十六日のこと、その途上、船中から友人に宛てた手紙⁽¹¹⁾のなかで、彼はつぎのように語っている。

「つい今しがた『創造』創刊号の『最初の授業』を読みおえた。私がどう感じたか、考えてもみてくれ。同種の日本人でさえこうならば、異種のアメリカ人はどんなであろう。」

聞一多はすなわち、英語における中国人に対する蔑称 *Chinaman* の訳語として、当時「異常」なほどまでに嫌われていた「支那人」という語を、それが、世界中に最も多く、しかもいたるところにいるねずみと支那人、支那人でも発明できるのか、と侮蔑をもって発せられる日本語であることをふまえたうえで、自らの詩のなかで、自らが称せられるのではなく、自らを称する言葉——支那人に聞け——として用いているのである。

彼は、例えば一九二二年九月二十四日付、友人吳景超宛の手紙⁽¹²⁾のなかで、つぎのように述べている。

「まず君に、最近の拙作二編⁽¹³⁾を読んでもらえば、私の最近の心情がわかってもらえるであろう。『国を出てみなければ、家を思う気持はわからない』とは一昨日、繁祚、方重への手紙に書いたところだが、君も来年の今頃に

はこの言葉の意味がわかるだろう。君がこの二編の詩を読んで、私の思うのが狭義の『家』だと誤解することはあるまい。そうではないのだ。私の思っているのは、中国の山川、中国の草木、中国の鳥獣、中国の家屋、中国の人なのだ。」

聞一多は、同年八月七日シカゴに到着、シカゴ美術学院 (The Art Institute of Chicago) へ入学するが、この手紙は、そこでの授業の始まる前日に書かれたものであった。

また、一九二三年一月には、故郷の家族に宛てた手紙⁽¹⁴⁾で、こう述べている。

「アメリカは、私がながく滞在していられる土地ではありません。思想を持った中国の青年がアメリカにいる気持は、筆墨で形容できるものでありません。(略)私は国を有する民であり、私には五千年の歴史と文化があります。どうしてアメリカ人に劣りましょう。われわれが人殺しの鉄砲を製造できないために、かの文明に及ばないというのでしょうか。要するに、彼らわが国人を蔑視することは一言では尽くせません。」

やがて同年十月には、コロラド大学美術科に、一年後には、Art Students' League of New York に入る。だが、ここでも聞一多は、一九二五年一月十一日付、梁実秋宛の手紙⁽¹⁵⁾に、

「いま Series of Sketches をつくって、この国における中国人虐待の物語を書こうと思っている。体裁は自由詩か、Henley⁽¹⁶⁾ の "In Hospital" のようなもの。」

同年四月、同じく梁実秋宛の手紙⁽¹⁷⁾に、

「異国に蟄居するは、なんぞ謫戍と異ならん。早々に帰国し、まことに上策をなさん」

と記している。それから約一カ月の後、聞一多は、ついに帰国の途につく⁽¹⁸⁾。五年間、官費で留学生活を送れるところ

を、三年で、しかも博士の学位を取得することもなく帰国する。卒業即失業の時代であり、帰国したところで就職のあてもなかった。⁽¹⁹⁾

「洗濯の歌〔洗衣歌〕」は、以上のような留学体験のもとに作られた作品である。やはり一九二五年四月、梁実秋宛の手紙に、⁽²⁰⁾

「先の手紙で『洗濯の曲〔洗衣曲〕』には字句を訂正すべき箇所があるといったが、暇なときにも詳細をお知らせ下さい。」

とあることから、このときまでに、「洗衣歌」の原形はできあがっていたものと考えられる。また、それは、アメリカにおける「中国人虐待の物語」の一つであったかもしれない。そう考えたとしても時期的にはあう。

劉焯「聞一多、三たび『洗衣歌』を改める」⁽²¹⁾によれば、この詩は書きあげられるや、まずはじめに彼の属する国家主義団体の機関紙『大江季刊』に送付され、一九二五年七月に出版された同誌第一期（創刊号）に「洗衣曲」⁽²²⁾と題して掲載されたという。

だが、この詩がまずはじめに発表されたのは『現代評論』誌上においてであった。聞一多は、同誌第二卷第二十九期（一九二五年六月二十七日）に詩「醒呀！」とともに、つぎのような一文を発表している。

「これらは、なが年国外にあって、帝国主義に憤怒のあまりあげた不平の叫び声であり、もともと、アメリカ留学中の同人らでおこした一種の国家主義を鼓吹する雑誌『大江』に提出してあったものである。しかしながら、現在まさに帝国主義が滬漢（上海、漢口）においてこうした惨劇を演ずるにあたり、『大江』出版にはいままお時日を要するため、私はこれらの詩をいちやく発表することにした。それらが同胞中に敵愾心を燃えたたせ、

激昂する民の士気をさらに激昂させんことを願う。(以下略)

そして、その後ひきつづいて『現代評論』第二卷第三十期(二五年七月四日)に「七子之歌」、第三十一期(二五年七月十一日)に「洗衣曲」、「愛国的心」⁽²³⁾、第三十三期(二五年七月二十五日)に「我^は是^は中国人」を発表している。滬漢において演じられている惨劇とは、五・三〇事件——聞一多が帰国の途についたその月の三十日に上海で起こった中国人射殺事件を口火とする中国の反帝国主義、愛国運動——のことである。帰国した聞一多は、「こうした惨劇」を目の当たりにするや、同胞中に敵愾心を燃えたたせ、激昂する民の士気をさらに激昂させんことを願って、ただちにこれらの詩五編を選び『現代評論』誌上に発表したのであった。そのうち、詩集『死水』に収められた詩は「洗衣曲」のみである。

ここで、『現代評論』誌上に発表された「洗衣曲」をあげてみよう。

洗 衣 曲

洗 濯 の 曲^{うた}

美國華僑十之八九以洗衣爲生，

アメリカ在住華僑の十中八九は洗濯を生業としている。ために外国

外人至有疑支那乃學國洗衣匠

人は、支那は国をあげての洗濯屋かと疑うにいたる。本国人も国外

者。國人旅外之受人輕視，言

へ旅に出れば軽視され、これをいえば心も痛む、よってここに、洗

之心痛。爰假洗衣匠口脞作曲

濯屋の口吻をかりて曲^{うた}を作り、もって不平を鳴らさん。

以鳴不平。

（一件，兩件，三件）

洗衣要洗乾淨，

（四件，五件，六件）

熨衣要熨得平。

（全集版第一連と同じ）

銅是那様臭，血是那這樣腥——銅はあんなに臭く 血はあんなに腥い——
 髒了的東西你不能不洗， 汚れたものは洗わなければなるまい
 洗了的東西又不能不髒。 洗ったものもまた汚れずにはすまない
 有耐性的人們理他不理？ 忍耐づよい人たちは放っておくのか

替他們洗！替他們洗！ 彼らにかわって洗ってやれ 彼らにかわって洗ってやれ

（全集版第二連と同じ）

我洗得淨悲哀底濕手帕，
 我洗得白罪惡底黑汗衣，
 貪心底油膩和慾火底灰：
 你們家裏一切的髒東西
 交給我洗！交給我洗！

你說洗衣的買賣太下賤，
幹這種買賣惟獨有唐人。
你們的牧師他告訴我說：
耶穌的爸爸做木匠出身。
你信不信？你信不信？

君は洗濯屋という商売は賤しすぎて
こんな商売をするのは唐人だけだと言う
(以下、全集版第四連第三、五行と同じ)

洗衣定規是一件容易事，
洗衣那裏比得上造兵船？
洗衣匠們真個是沒出息，
流了一身苦汗賺不了錢。
你們肯幹？你們肯幹？

洗濯はたしかに容易なことだ
洗濯がなんで軍艦を造るのに比べられよう
洗濯屋たちにはまるで見込みがない
苦しみの汗を身体中に流してもいくらかせぎにもならぬ
あなた方にはやれるか　あなた方にはやれるか

年年洗衣三百有六十日，
看不見家鄉又上不了墳。
你們還要笑我是洗衣匠，
你們還要罵我是支那人。
好狠的心！好狠的心！

毎年三百六十日洗濯にあけくれ
故郷も見られず墓にも参れず
あなた方はそれでも私を洗濯屋だと笑う
あなた方はそれでも私を支那人だと罵る
むごい心だ　むごい心だ

(一件，兩件，三件)

(全集版第一連と同じ)

洗衣要乾淨，

(四件，五件，六件)

熨衣要熨得平。

*脚韻：a b a b × c × c c × c × c c × b × b b

× a × a a × b × b b a b a b

この「洗衣曲」が、まずはじめに世間に発表されたものであった。つづいて『大江季刊』誌上にも「洗衣曲」(未見、以下大江版と称す)が掲載されたわけであるが、それは『現代評論』掲載の「洗衣曲」(以下、現代評論版と称す)よりも前に書きあげられたものであることは、さきに述べた。劉焯は、「聞一多、三たび……」のなかで、聞一多は帰国して間もない緊迫した時期にあって、この時を五箇所も修正して『現代評論』誌上に発表した、と述べている。それによれば、例えば、現在評論版「洗衣曲」の第四連一、二行めは、もともと、すなわち大江版においては、

你說洗衣底買賣太下賤

君は洗濯屋という商売は賤しすぎて

這種的買賣唐人搶不贏

こんな商売が唐人の定めなのだという

であったという。こんな商売が「唐人の定めなのだ、(逆っても打ち勝てないのだ)」という箇所を、こんな商売をするのは「唐人だけだ」(現代評論版)と改めた方が、意味もより鮮明となり、詩行の続き具合も自然である、と劉烜はいう。なお、同文中には「『大江季刊』第一期(一九二五年七月)に登載された『洗衣曲』」という説明とともに、その頁の写真が収められ、また、その詩に付された小序も引用されてある。この引用を手がかりにすれば、写真の方の小序もかろうじて判読できる。小序については、現代評論版と同一である。

だが、この詩は一九二八年一月に出版された詩集『死水』に収められるとき、さらに大幅に書き改められている(未見、以下死水版と称す)。劉烜「聞一多、三たび……」によれば、詩の題も「洗衣歌」とされ、小序も、

「洗濯屋は、アメリカ在住華僑に最も多い職業である。だから留学生はいつも聞かれる、『君のお父さんは洗濯屋か』と。多くの者は、この侮辱に我慢がならぬ。しかしながら、洗濯屋という職業には、たしかにいくらか神秘的な意義が含まれてある。少なくとも私は、かつてはそう思い、そして洗濯の歌を作る。」

に書き改められたという。そして、この序の「最後の四十二字」(訳文では、「多くの者は……」以下の部分)は、その後、聞一多が自ら詩を選んだときに削除したという。

この章のはじめにあげた「洗衣歌」は全集版、すなわち『聞一多全集』第三卷詩集『死水』に収められたものである。現在刊行されている聞一多の詩は、すべてこの全集によるものであり、一九二八年一月に出版された詩集『死水』がどのようなものであったか、確かめるすべはない。しかしながら、全集版「洗衣歌」には、この詩の小序の部分についての、み、「このあとには、もと四十二字あったが、いま先生の選詩訂正本によって削除する」と注記されていることから、死水版「洗衣歌」は小序を除いた部分については、全集版「洗衣歌」と同じものであったのではない

かと思われる。なお、『選詩訂正本』がいつごろ作成されたのか、また、どのような詩が収められたのか等については、全集の注から推測される他は、すべて不明である。

ところが、現代評論版「洗衣曲」と全集版「洗衣歌」との間には、全部で十二の詩行において異同がある⁽²⁴⁾にもかかわらず、劉焯は「聞一多、三たび……」のなかで、現代評論版「洗衣曲」と死水版「洗衣歌」との間には十一の詩行において異同がある、と述べているのである。したがって、死水版と全集版（すなわち『選詩訂正本』によったもの）との間には、小序の部分の他に、さらにもう一詩行において異同があったのかもしれない。このことについて、劉焯は何もふれていない。だが、「聞一多、三たび……」では、現代評論版「洗衣曲」の詩行を誤って引用している箇所もある⁽²⁵⁾ため、あるいはこの記述も誤りであるかもしれない——両者とも、それは印刷の誤りであったかもしれない。いずれにせよ「洗衣歌」の詩行の部分については、死水版、全集版とも、ほとんど同じものであったと考えられる。

また、劉焯のあげた大江版「洗衣曲」の写真を見れば、この詩は一連からなっているが、現代評論版では、全部で七連からなっている。劉焯は、両者の間に五箇所の異同があると述べていることは、さきに記したところであるが、写真によって大江版「洗衣曲」を細部にわたって判読することは不可能である。しかし、この両者の間には、現代評論版では全七連に分けられたとはいえ詩行の配列もそのままであり、発表された時期も同じ一九二五年七月であることから、現代評論版と死水版あるいは全集版ほど大きな差異はなかったものと考えられる。

そこで、以下、私の手元にある現代評論版「洗衣曲」と全集版「洗衣歌」とを、比較対照してみることにする。

まず、この両者の間の大きな差異は、後者では、前者の第二連を第三連に、第三連を第二連に入れかえ、さらにこ

の第二連をもう一度、第七連にもってきて、全部で八連にしているということである。だが、第一連は両者とも全く同一であり、聞一多はこの詩を、一枚、二枚、三枚、洗濯はきれいに、四枚、五枚、六枚、アイロンはまっすぐに、という洗濯屋のかけ声から詠みおこしている。そして、「洗衣歌」第二連のように、「私は悲しみに湿ったハンカチをきれいに洗う／私は罪悪に黒ずんだ下着を白く洗う」とつづけられてゆけば、「洗衣曲」の小序——洗濯屋の口吻をかりて曲を作り、もって不平を鳴らさん——によるまでもなく、聞一多が自らを洗濯屋に比して歌うたっていることは明らかとなる。ところが、「洗衣曲」第二連では、洗濯屋のかけ声のあとに、いきなり「銅はあんなに臭く、血はあんなに腥い」という詩行がつづけられているのであるから、読者はいささか唐突な感をまぬがれないであろう。むしろ、この方が、さきにあげた聞一多の手紙に見られるような、アメリカ及びアメリカ人、アメリカ文明に対する激しい憤り、いらだちが、より直接にあらわなかたちで表現されているといえる。そうではあったとしても、しかし、この連の三行めは、「洗衣歌」の方がはるかにすぐれたものとなっている。

洗濯とは、われわれの日常生活のなかで、たえず繰り返され、また繰り返してゆかねばならぬ、あまりにありふれた行為である。われわれは、悲しみに湿ったハンカチ、罪悪に黒ずんだ下着、それから貪欲の垢と欲の火の燃えさかたあとに残された灰、すなわちありとあらゆる人間の営みに穢された汚物を、きれいに真白く洗わねばならない。きれいにその汚れを洗い落してしまわなければ、われわれはこれからさきも生きつづけてはいけない。だが、そのようにして真白く洗ったものも、やはりまたすぐに汚れてしまう。それは、洗っても洗ってもまた汚れ、かくして洗濯は永遠に繰り返されてゆく。この徒労感、反復の悲哀を表現するのには、やはり「洗衣歌」第三連三行めの「洗過了的東西還是得髒」でなければならぬ。「洗衣曲」では、第二連二、三行めが、

髒了。的。東。西。你。不。能。不。洗。
洗了。的。東。西。又。不。能。不。髒。

というふうに対となつて、あまりに調子よくリズムカルに詩行が流れすぎてしまっている。聞一多は、それを「洗衣歌」では、

髒了的東西你不能不洗，
洗過了的東西還是得髒，

に改めている。動詞「洗う」「洗」のあとに、過去の経験を示したり、その動作が過去におこつたことを強調したりする「過」を付属させ、また、同じ動作・状態の反復を示す「又(you)」を、二音節語「とどのつまりは、やっぱり〔還是(háishi)〕」にかえ、そこで詩行のリズムを停滞させたくえで、「(汚れ)ずにはすまない」ということを表現するのに、その前の詩行と同じリズムミカルな「不能不(bù néng bù)」を用いることなく、この三字(音節)を、低いところでゆっくりしている第三声の「得(dé)」一字(音節)に凝縮させているのである。

聞一多は、「洗衣歌」第一連において、まず、一枚、二枚、三枚……と、洗濯物の枚数をかぞえる洗濯屋のかけ声を反復させ、さらに、同じ連の二、四行め、また第二連の一、二行めを対にするとともに、前者では同一行内で各「洗」と「髒」を反復させ、後者では二行にわたって「我洗得」を反復させている。この手法は、洗濯がたえず反復

される行為であること、また洗濯屋の営みが極めて単調なものであることを、読者に印象づけるうえで効果的である。聞一多は、そのなかで自らをアメリカ在住華僑の洗濯屋になぞらえ、「私は悲しみに湿ったハンカチをきれいに洗う／私は罪悪に黒ずんだ下着を白く洗う」とうたっている。だからこそ、「あなた方の家の汚れたものは一切合財／私にわたして洗わせる 私にわたして洗わせる」とつづける。

そして第三連で、はじめて「銅はあんなに臭く 血はあんなに腥い……」と、アメリカ文明への嫌悪の情を爆発させる——聞一多は、アメリカ留学中に作った詩「孤雁」⁽²⁶⁾のなかで、太平洋のかなたアメリカ、そこは蒼鷹の領土、かの鋭き爪で、自然の面目を引き裂き、財力の巢を築く、ここでは銅や鉄の機械が、弱者の鮮血に酔いしれ、罪悪の黒煙を吐き出すばかり、とうたっている。

銅はあんなに臭い、血はあんなに腥い、それらに汚れたものは洗わなければなるまい、だがそのようにしてきれいに洗ったものも、やっぱり汚れてしまう。あなた方アメリカ人は、それを自分で洗いもせずに放っておくのか、チャイナマン聞一多は、ならば彼らに代わって洗ってやれ、彼らに代わって洗ってやれと言葉をたたきつける。そこには、聞一多の激しい憤りと、単調な洗濯を限りなく繰り返してゆかねばならないチャイナマンの悲哀と徒労感が表白されている。なお、この連四行めの「有」、「他」が、「洗衣歌」では各「你」、「它」に改められているのも、それらが何を指し示しているかを明確にするうえで、適切なものだといえる。

第一連から第三連まで、自らを洗濯屋になぞらえ、洗濯をしつづけた聞一多は、だがしかし、そうしたチャイナマンの定めに甘んじてばかりはいない。第四連では、留学先における中国人蔑視、中国人——チャイナマン——洗濯屋といった社会通念に対し、強烈な反駁を加えている。君は洗濯屋という商売は賤しすぎて、賤しい商いをするのは店

人だけだともいうのか、あなた方の牧師は、イエス・キリストのお父さんは大工だったと私に教えてくれた、君はそれを信じないのか、信じないのか、と。

この連第二行も、「洗衣曲」では

幹、這種買賣惟、獨、有、唐人

であったのが、「洗衣曲」では

肯、下賤的、只、有、唐人不成、

に改められている。「君は……という」、だが「あなた方の牧師は……」と詩行をつづけるのではなく、「這種」を省いて詩行の最後に「不成」をもってくることによって、「君は……とでもいうのか」と激しく詰問するかたちに改めているのである。その方が、聞一多の反駁がより正当なものとして立証されるべく、つぎの詩行で牧師の教えを畳み掛けていくうえで、適切なものとなっている。また、下賤な商いを、単に「する〔幹〕」ではなく、「喜んでする、自分で納得してする〔肯〕」に改めることによって、唐人は、こんな「賤しい」商いを、喜んでやっているとでもいうのか、それが唐人だけだともいうのか、と詰問、反駁の語調をより強いものになっている。「惟獨 (weidú)」も「只有 (zhīyǒu)」に改められ、この詩行のリズムをより激しく強いものになっている。なお、「唐人」とは、広東語で中

国人をいう古い言い方、『辞海』には、「華僑もまた自らを唐人と称す」と記されている。

第五連については、「洗衣曲」も「洗衣歌」も、内容的にはほとんど同じことをうたっている。だが、ここでは、五行中、四行までが大幅に書き改められている。「洗衣曲」にうたうように、洗濯はたしかに容易なことである。しかし、この表現では、あまりに安易である。やはり、「洗衣歌」の「石鹼とただの水では（あなた方ほど）手練手管は使えない」の方が、チャイナマン、洗濯屋のイメージはふくらんで、より一層生き生きとしたものとなっている。また、三、四行めの「洗濯屋たちにはまるで見込みがない／苦しみの汗を身体中に流してもいくらかせぎにもならぬ」という表現では、洗濯屋の口吻をかりて曲を作り、不平を鳴らさんとした聞一多にしては、あまりに客観的かつ説明的な叙述である。「洗濯はもともと軍艦を造るのにはかなわない」（洗衣歌）、これは当り前のことであり、それをわざわざ反語表現にして疑問符を持つてくる必要はない。少なくとも当時のアメリカでは、現実に、「洗衣曲」第四連一、二行めにうたうように、洗濯屋なんぞという賤しい商いをするのは唐人だけだといわれていたか、あるいは、いわれないまでもそうした社会通念はあったのである。それにたいし、聞一多は、「洗衣歌」のなかでは、なおも自らをチャイナマン、洗濯屋として、「われながら一体どんな見込みがあるものかと思う——／血と汗を身体中に流して他人の汗を洗うのか」と、ここに疑問符を持つてきているのである。そこには、他人の汗を洗い落しながら、自らは身体中に血と汗を流してゆかねばならない洗濯屋の、ひいては軍艦を造ることなどでは到底たちうちできない弱小民族の悲哀が、あふれんばかりに流露している。だが、そうしたことが「あなた方にはやれますか あなた方にはやれますか」と問われたとき、読者は、そこに聞一多が死水版小序で述べた「神秘的な意義」を見出さないであろうか。下賤な者と蔑まれつつも、そのように蔑む人々のありとあらゆる営みに穢された汚物を、自らは血と汗にまみ

れつつ永遠に洗いつづけてゆく洗濯屋の姿に、崇高なものをさえ覚えないうか。

かくうたいあげた後に、聞一多は、はじめて「年が去り年が来たりて故郷を思ふ涙の一滴／真夜中に洗濯屋の燈が一つ……」と、涙をこぼす（第六連）。ここでもやはり、「洗衣曲」の解説を施してでもいるかのような詩行を、甘く切なく流れる対句に改めている。それは、

天涯閉戸賭清貧

天涯に戸を閉ざして 清貧に賭す

斗室孤燈萬里身

斗室の孤燈 万里の身

と、梁実秋宛の手紙⁽²⁷⁾にうたったアメリカ留学生聞一多自身の姿でもあった。しかし、彼は悲嘆にくれてばかりはいない。洗濯屋が下賤であろうとなかろうと、そんなことにはかまうな、汚れていたら皺がよっていたら、支那人に聞け、支那人に聞けと、詩行を畳み掛けていく。そこには、支那人^{チャイナマン}、洗濯屋と蔑まれる中国人としての誇りさえ感じられる。ならば、あなた方の家の汚れた物は、一切合財、私が洗ってやろうではないか、私が洗ってやろうではないか——（第七連）、かくしてチャイナマンは、洗濯をしつづけてゆく。

「洗衣歌」には、虐げられるものの深い悲しみと、虐げるもの、弱者の鮮血に酔いしれ、罪悪の黒煙を吐き出すものに対する痛烈な批判——それは単にアメリカという国にのみむけられたものではなく、もっと普遍的な意味あいさえ持ちうるであろう——が、うたわれている。聞一多は、当時のアメリカにおいて蔑視の対象とされていた洗濯屋に自らを比して歌うたうことによって、個人的な、また民族的な憤りにかえって普遍性を持たせるまでに至っているの

である。

それは、「洗衣曲」第六連の、あなた方はそれでも私を支那人だと笑う、それでも私を支那人だと罵る、むごい心だ、むごい心だ、と好対照をなす。何よりもまず、アメリカに対する、よりあらわなる嫌悪と憤りからうたいはじめられたこの曲は、激昂のあまりにか、ついに、ここでは遣る方のない極めて受動的な泣き言にまでなってしまうている。笑われ罵られ、むごい心だとはうたっても、それでは、チャイナマン、洗濯屋と蔑むものに対する反駁、批判は色褪せたものとなってしまふ。ほとんど原形をとどめないほどに改められたのが、この第六連である。

なお、「洗衣歌」では、第一連は第八連で、第二連は第七連で、それぞれ反復され、また、第一連と第八連を除く各連末行で、それぞれ四字句が反復されている。簡潔かつ整然たる連構成である。こうした反復の技法は、洗濯というたえず反復される単調な営みをうたううえで、相応しいものであったといえるだろう。董楚平は、「聞一多の『死水』から新格律詩問題まで」⁽²⁸⁾のなかで、

「『死水』のなかで、作者はそうえつねに民謡の反復（疊唱）の手法を用い、主題を突出させ、語勢を強め、すぐれた音楽的效果をもたらしている。」

「四十年の新詩史上において、『死水』ほど『疊詠』の調子に富んだ詩集は、極めて稀である。近年来、民謡体を慣用している詩人でさえ、少ししか用いておらず、反復は、ときには芸術的趣向から労働人民と知識分子とを見分ける目印の一つでもあるようだ。」

と述べている。このことからすれば、聞一多が「洗衣歌」で用いた連構成は、当時において極めて大胆な試みであったといえる。

現代評論版「洗衣曲」と全集版「洗衣歌」との間の異同は、以上のとおりである。それは、ほとんどそのまま現代評論版と死水版との間の異同に置きかえられる。すなわち、聞一多は、『現代評論』誌上に掲載された「洗衣曲」を、かくも大幅に書き改めて、詩集『死水』に収めたのである。また、このときには、文語で書かれた現代評論版「洗衣曲」の小序の部分をも大幅に書きかえ、この詩を完全なる口語詩としている。小序は、その後さらに「最後の四十二字」が削除され、説明を省いたより一層簡潔なものとなった。劉焯のいうように聞一多はこの詩を『大江季刊』に送付して以来、実に三度も書き改めたのである。「洗衣歌」もまた、新しい中国の詩、子供でも英雄でもない「私」たち自身の歌を模索せんとする詩人聞一多の、様々な試みの一つだったのである。

一九二六年三月発行の『中華教育界』（第十五卷第九期）に収められた常道直の「留米学生の場合と今後の留学政策」には、アメリカ留学生の欠点として、漢文の程度低劣、わが国の国情を解せず自国を侮蔑する、愛国心旺盛ならず等の七つがあげられている。また、一九二四年四月発行の同誌（第十三卷第十期）に収められた怡怡の「留学生問題」には、アメリカ留学出身者は、全く外国崇拜でわが国民をみて、「こんな劣等民族は速く亡びるがよい」と思うものも決して少なくない、とすら記されている。²⁹ 聞一多がアメリカから帰国し、「洗衣曲」等の詩をつぎつぎに発表していた、ちょうどその頃に、他方ではこうした情況もあったのである。朱自清は、「愛国詩」³⁰のなかで、

「抗日戦争以前においては、彼はほとんど唯一の意識して愛国をうたった詩人であった。」
と述べている。（つづく）

（一九八一年十月二十二日）

注

- (1) 昭和二十六年六月十二日、自由学園に於ける講演、倉石武四郎訳。『婦人之友』第四十五卷第八号(婦人之友社、昭和二十六年八月一日)所収、三一、三二頁。
- (2) H. Wentworth & S. B. Flexner, *Dictionary of American Slang* (Thomas Y. Crowell Company, New York: 1975)
- (3) 本論一一頁参照。
- (4) 本論一三頁参照。
- (5) 上海辞書出版社。
- (6) 商務印書館、一九七八年十二月第一版、一九七九年十一月北京第十次印刷。
- (7) 『中国文学』第六卷(汲古書院、昭和五十二年十月)所収、二一九、二二一、二二三頁。
- (8) くろしお出版、一九七〇年十月、二二二頁。
- (9) 『達夫中篇小説集』(上)(智明書局)所収、一五八頁。訳文は、『現代中国文学6 郁達夫・曹禺』(河出書房新社、昭和四十六年十二月)、五七頁による。
- (10) 『東山』というペンネームで発表された。『創造社資料』第一卷(アジア出版、一九七九年二月)所収、六六〇六九頁。
- (11) 一九二二年七月二十九日付。『聞一多全集』第三卷「書信」(以下、「書信」)所収、九頁。
- (12) 「書信」所収、一七頁。
- (13) 詩「晴朝」、「太陽吟」のことであり、この手紙のまずはじめに記されている。二編とも「紅燭」所収。
- (14) 「書信」所収、六九頁。
- (15) 『聞一多全集』第一卷「年譜」(以下「年譜」)所収。
- (16) William Henley (1849~1903) 『病院』In *Hospital* (1903) の詩(未見)などで知られたイギリスの詩人。
- (17) 「書信」所収、三六頁。「年譜」、一九二五年四月の項参照。
- (18) 「年譜」一九二六年三月の項に、聞一多は一九二五年七月に帰国したものと考えられる、と注記されている。だが、梁実秋の『談聞一多』(伝記文学出版社、一九六七年二月)によれば、一九二五年六月に北京に戻ったという(六三頁)。同年四月二十四日付、梁実秋宛の手紙(「年譜」、『談聞一多』所収)には、五月四日にニューヨークを離れ、十四日に上船すること

に決めた、と記されており、「年譜」にも、同年五月にアメリカを発った、と記されている。アメリカを発った時期、また「現代評論」誌上に六月末から七月にかけて、つぎつぎに詩を発表している——発表の時期は、同誌に記された出版の日付による、本論一〇、一一頁参照——ことからすれば、六月下旬には帰国していたのではないかと思われる。

(19) 「談聞一多」六二頁、王康「聞一多伝」(湖北人民出版社、一九七九年五月) 八四頁による。

(20) 「書信」所収、三四頁。「年譜」一九二五年四月の項参照。

(21) 「新文学論叢」第二輯(一九七九年)(人民文学出版社)所収。

(22) 「年譜」一九二五年七月の項には「浣衣曲」と記されている。

(23) 同誌目次では、「愛国心」となっている。

(24) 現代評論版「浣衣曲」、第二連第一行をも含めれば、十三の詩行において異同があることになる。だが、劉焯のあげた写真によれば、大江版「浣衣曲」の段階から、この詩は格律詩であり、一行の字数も整えられ、この行は十字からなっている。写真を判読すれば、「銅是這様臭血是那様腥——」ではなかったかと思われる。この「這」、「那」の箇所を、現代評論版

では、各「那」、「這」に改めようとしたために、印刷の誤りが生じ、一行十一字になったと考えられる。しかし、「血是這様腥」に改めようとしたのか、それとも「血是那様腥」のままでおこうとしたのかについては、不明であり、また、他の箇所ほど大きな差異ではないために、ここでは省いて考えた。

同第七連第二行「浣衣要乾淨」は、明らかに第一連第二行「浣衣要洗乾淨」と同じものであったはずである。大江版からこの連は一行六字であり、印刷の誤りであると考えられる。また、同第三連一、二、三行めの「底」も、全集版ではすべて「的」に改められているが、ここでは省いて考えた。

(25) 現代評論版「浣衣曲」第六連第二行を、「看不見了家郷又上不了墳」と引用している。

(26) 「紅燭」所収。

(27) 本論九頁で引用した、「異国に蟄居するは……」の手紙(一九二五年四月)。

(28) 「文学評論」一九六一年第四期(人民文学出版社)所収、八三頁。

(29) 実藤恵秀「中国人のアメリカ留学」(『中国文学』第六十八号、昭和十六年一月)、「中国文学」第六卷(汲古書院)所収、五一五頁。

(30) 「新詩雑話」(港青出版社、一九七八年十二月)所収、四八頁。